

メディカルはこだて

Medical Hakodate

2025

August

92

亀田病院は昨年4月より訪問診療を開始
食べることを支える「口腔・摂食嚥下外来」を開設
血管撮影・インターベンション専門診療放射線技師の資格を取得
市立函館病院は5人の院内救命士が活躍
低侵襲の全内視鏡下脊椎手術を実施
総合診療と訪問診療で地域に貢献する
今年4月血液腫瘍内科医師として就任

市立函館南茅部病院の新院長に栗原将人氏が就任

函館五稜郭病院の耳鼻咽喉科は
道南圏から多くの頭頸部がんの患者が集まる

2025年4月、市立函館病院の副院長に就任

高橋病院は患者の満足度向上のための
多職種横断によるプロジェクトチームを設置

市立函館病院は「DX推進チーム」を設置
デジタル技術を活用して業務プロセスを改善



高橋病院は患者の満足度向上のための

多職種横断によるプロジェクトチームを設置

高橋病院（高橋肇理事長）は、2024年10月1日から新病院での診療を開始した。新病院は鉄筋コンクリート4階建て、延べ床面積は旧病院の約1.5倍の1万6700平方メートル。建物の特徴的な外観はクラスタ型と呼ばれる独特な形だ。

1階は外来や検査室、訪問診療室、総合支援センター、コミュニケーションスペースなど。160平方メートルの広さがあるコミュニケーションスペースは、誰でも自由に集える交流の場として活用している。2階は回復期リハビリテーション病棟の病室が南北にそれぞれ40床ずつ配置され、中央には全面ガラス張りのリハビリテーション室が設けられた。自動車運転再開を目指す方を対象

としたドライビングシミュレーターなどの最新機器も充実している。3階は地域包括ケア病棟と介護医療院。4階は医局や会議室、事務室、職員専用ラウンジなどが設けられている。

同病院は西部地区から時任町への移転新築をするにあたって患者の満足度向上のための多職種横断によるプロジェクトチームを設置した。チームメンバーは、病棟や外来の看護師、リハ

ビリや事務部門のスタッフなど計8人。リーダーは総合支援センターの豊嶋亜希センター長。法人情報システム室の滝沢礼子室長がオブザーバーとして参加している。



総合支援センターの豊嶋亜希センター長

滝沢さんは「函館は回復期の病院が多い地域です。その中で選ばれる病院となるためには、患者さんやご家族の満足度を向上させる具体的な取り組みが必要です」と話す。プロジェクトチームでは移転する病院の強みや弱みを洗い出すためのSWOT（スウオット）分析を実施。その結果を基にチーム内で議論を重ねてきた。滝沢さんが室長を務める法人情報システム室は地域全体で共有できる生涯カルテ構築、IT化による組織づく

り・人づくりを目指し、多方面に亘る業務を担っている。豊嶋さんは「滝沢さんは各部署の事情なども細かく熟知しているので、課題を解決するためにどの部署やチームと調整・交渉をするべきかなど常に適確な助言をしてくれています」と話す。プロジェクトチームのアイデアから実現したものについて、豊嶋さんに話を聞いた。

ペットとの面会

アイデアの一つがペットとの面会だ。入院患者が飼っている犬や猫などのペットと病院内のスペースで会うことができる。豊嶋さんは「ソーシャルワーカーとして、これまでも入院患者さんからは入院中も飼っているペットに会いたい、早く退院して会いたいという声をよく聞いていました」と言う。1階のコミュニティスペースの屋外に高さ1階のフェンスで囲った面会スペースが設けられた。フランス語で「愛おしい子」を意味する「L'oullou（ルール）」と名づけられた面会スペースに



1階のコミュニティスペースの屋外に設けられたペット面会スペース



6月11日、1階コミュニティスペースで開催された第1回「おうちごはんの会」

はベンチも置かれ、ペットとゆっくり過ごすことができる。「ホスピスや緩和ケア病棟ではペット面会を許可している施設はありますが、回復期病院で取り組んでいるところは珍しいようです」。時間は1回50分、1日3組限定で、予約制としている。「家族同然のペットとふれ合うことは、入院中のストレス軽減やリハビリの意欲を高める効果も期待できます」。ペット面会はこれまでに5人が利用している。

「おうちごはんの会」を開催
今年6月11日、1階コミュニティスペースで第1回「おうちごはんの会」が開催された。おうちごはんの会は管理栄養士による料理教室で、第1回のテーマは「おやつで栄養」。当日は管理栄養士による講話の後で、参加した地域住民と一緒に「おやつ作りを行った。作ったのはリンゴのベニエ風です。ベニエとはフランス発祥のお菓子で揚げた生地のこと。ドーナツ

のようなお菓子のことを指します」
おうちごはんの会は、「食」で入院患者の意欲を高めたいということが出発点だった。「入院が長くなると、家族が作った味噌汁が飲みたいという希望も出てきますので、家族が自宅の味噌を持参して、調理スペースで作って食べてもらう。入院患者さんが食欲のない時には、好きなものをそこで作って食べたることができるようにするなど、その第一歩として地域住

民を対象とした『おやつ作り』からスタートしました。次回の「おうちごはんの会」は9月の開催を予定している。

個室での面会時間は
午前8時から午後8時まで

移転後の同病院は病床稼働率（病院の病床がどの程度使用されているかを示す指標）が100%前後で推移している。入院紹介件数は大幅に増え、外来患者数も順調に伸びているなど、患者数に関する指標は良い数字が続いている。

プロジェクトチームでは「療養環境の差別化」をするために、個室の面会時間を大幅に延長した。「通常の面会時間は午前11時から午後7時までですが、個室は午前8時から午後8時です（日曜・祝日は午前10時から午後8時まで）。入院患者との面会は、時間や人数などの制限がある施設がほとんどだが、制限はほとんど撤廃した。「時間を気にせず、人数も関係なく面会することが出来ます。一緒に食事をし、記念日をお祝いするこ



個室は32室ある。
個室の差額料金は3000円と2000円の2種類。

とも可能です」

32室ある個室の差額料金は3000円と2000円の2種類。「病室は新しくできれい」と評判で、さらに利用しやすい料金設定であることから、個室希望の方からの問い合わせも多いなど人気は高いです」

病床利用率の高い状況が続いているので、ベッドコンロー

ルは非常に難しいが、「ベッドコントロールを担当するソーシャルワーカーは各病棟に配置し、スタッフステーションで業務を担当しています」。従来のナースステーションを新病院では「スタッフステーション」と呼び方を変え、機能を充実させた。ナースステーションは医師と看護師などに限定されるが、

新病院では看護部門とリハビリテーション部門が統合した。「セラピストやソーシャルワーカー、介護福祉士、ケアワーカー、管理栄養士、歯科衛生士、薬剤師などのさまざまな職種が横のフラットな関係を構築できるスタッフステーションでは患者さんの情報も共有され、ベッドコントロールの調整もスムーズに行えるようになりました」

AIやICT（情報通信術）を活用した取り組み

同病院は「地域住民に愛される信頼される病院」を理念に掲げ、地域全体でリハビリテーションを中心とした医療福祉ネットワーク事業を展開。法人施設内外の継ぎ目のないネットワーク構築や、患者サービス向上の手段としてIT活用を積極的に進めてきた。

法人情報システム室は、診療や業務の根幹となる電子カルテシステムや部門システムの運用管理を始めとし、地域医療連携ネットワークシステム、介護システム、法人間ネットワーク運

用管理、業務用グループウェア、オンライン業務など、法人全体が安全に効率よく業務に従事出来るよう努めている。同病院のAIやICT(情報通信技術)を活用した取り組みなどについて、滝沢さんに話を聞いた。

電子カルテ情報共有サービスはモデル事業に指定される

政府は、患者情報を共有する「全国医療情報プラットフォーム」を2024年度から運用を開始した。この全国医療情報プラットフォームの仕組みの一つである「電子カルテ情報共有サービス」は、全国の医療機関や薬局などで患者の電子カルテ情報の共有を目的とし、全国10地域がモデル事業となった。道内では高橋病院と国立病院機構函館医療センター、森町の森町国保病院がモデル事業に指定され情報共有を始めた。

滝沢さんは電子カルテ情報共有サービスの特徴とメリットを次のように話す。「提供するサービスは診療情報提供書を電子で共有できるサービス、各種健診

結果を医療保険者及び全国の医療機関等や本人等が閲覧できるサービス、患者の6情報を全国の医療機関等や本人等が閲覧できるサービス、患者サマリーを本人等が閲覧できるサービスの4点です。これらのサービスによって、紹介状の持参が不要になり、健診結果の推移をまとめて確認できるようになります。また、アドバイスを踏まえた生活改善につながり、医療機関や医師が正確に情報の把握ができるようになることから、質の高い医療の提供につながることを期待されています」

医療従事者の働き方改革に貢献するAIの活用

医療の現場では、医療従事者の負担軽減や働き方改革が求められているが、その中でAIを活用した「医療DX」が注目されている。「AIを用いて電子カルテのデータから診療情報提供書や退院サマリーなどの文書を自動作成するサポートを開始しました」。使用する文書作成支援ソフトはインターネットに接続しないオンプレミス環境で動作する。「サイバー攻撃や情報漏えいのリスクが大幅に低減



法人情報システム室の滝沢礼子室長

し、患者の診療情報を外部に出さず、安全な環境下でAIを活用できます。クラウドを介さないため院内のセキュリティポリシーにも適合しやすく、安心して導入することができました」システムの特徴は利用者自身がプロンプト(AIへの指示文)を設定できる仕組みを採用していること。「診療科や医師ごとの異なる業務スタイルに合わせて、プロンプトを自由に編集し、自分に合った形でAIを活用できます。これにより、個々のニーズに応じた柔軟な使い方が可能となり、医療現場の実務に即した支援を実現します」

実際の作業は電子カルテ画面からシステムを起動し、文書を作ってもらおう。「現在はAIが作成した文書と、当院の医療従事者が作成した文書とを比較して、問題点などを抽出している段階です。医療従事者が毎日数時間費やしている文書作成をサポートし、業務時間削減を実現。業務効率を向上させることで、患者と向き合う時間を増やし、より質の高い医療の提供をサポートすることを目指しています」